芸術文化のまちづくりをめざす
発表・鑑賞・参加の場

今から11年前に誕生した文化会館コピスみよし。芸術文化に住民が広く触れ合う場として多くの住民が利用しています。しかし、文化会館の本当の役割を皆さんはご存知でしょうか。

発表

平成 14 年 4 月 21 日のこけら落とし公演では、プロのアーティストとフルート、ダンス、合唱など地域の皆さんが日頃の活動の成果を発表。以降、「合唱祭」「高校演劇フェスティバル」「のどじまん」「コピスの風コンサート」など、発表の場はこれまでの総事業数の約 3 割にものぼり、住民とともに歩む文化会館であることを印象づけています。参加者自身が出演者であり主催者であるため、発表に向けての練習を重ねるだけでなく、公演の企画、宣伝、チケット販売、運営など、自分たちの手で発表の場を創っています。

（写真）開館年から現在まで毎年開催されている高校演劇フェスティバル。三芳町在住の高校生が通う東上線沿線高校の生徒たちが、異なる高校同士で協力し合います。これまでにのべ 65 校、約 7,000 人が来場者を含め参加した。

町直営から指定管理者へ…コピスみよしは平成 22 年から、それまでの町直営から「東京ドーム・トールツリーグループ（代表団体：株式会社ケイミックス）」を指定管理者に置き運営されています。

町の芸術文化活動を発信する拠点として平成14年4月21日、町に初めて文化会館が誕生しました。コピスみよしと名付けられ、住民の〝発表・鑑賞・参加の場〟を目的として設立されました。日常生活のなかで芸術文化に触れ合う機会を増やし、住民が参加してみたいと思う、魅力のあるイベントなどを企画し、提供しています。

他の自治体が持つ文化会館なども、コピスみよしと同じような目的を持って設立されました。しかし、全国の約4割の文化施設では自主的な芸術文化活動（自主事業）を行っていないのが現状で、施設を貸すだけになっています。また、自主事業の8割は買取型公演（芸能プロダクション事務所や興行団体が企画するイベントなど）で、文化会館の運営者が創造的で独自的に企画・運営する制作型公演は、約5割にとどまっています。（※平成21年全国公立文化施設協会調査統計）

本来〝地域の〟芸術文化活動の振興が目的であった文化会館ですが、多くの自治体では人材や予算不足などを理由に、その機能を十分に発揮していないのが現状です。

では私たちが暮らす三芳町がめざす『芸術文化のまちづくり』とは具体的にどういったことなのでしょうか。コピスみよしが今年度行った取り組みを中心に振り返りながら、今回の特集で紹介します。■

→昨年の2月にコピスみよしで行われたベッキーさんのライブ。

鑑賞

町の郷土芸能である竹間沢車人形や、オーケストラ、吹奏楽、ポップス、落語、演劇などさまざまなジャンルの公演を行っています。過去には車人形とデーモン小暮さんとの異ジャンル共演を実現させるなど、創意工夫をこらした企画を展開しています。また、コピスみよしの座席は舞台から近く感じられるように配置されています。以前出演した夏川りみさんやベッキー♪#さんなど、人気のある芸能人をコピスみよしでは間近で観ることができます。

参加

さまざまなワークショップ（体験型講座）を行い、芸術文化に身近に触れることのできる機会を提供しています。事業に参加し、一流の芸術を手の届く距離で体験することや、人と人が同じ目標に向かい力を合わせることは、自分の可能性を発見し、感性や創造力を養うために、とても大切なことです。事業が終わっても住民同士が仲良くなり、知り合いの輪が大きくなるなど、地域コミュニティ向上を期待するといった目的もあります。

interview

筑波大学附属坂戸高等学校
演劇部顧問
竹内 義晴 教諭

コピスみよしはいまや、東上線沿線の高校演劇部あこがれの舞台となっている

地域と高校演劇部がつながり、文化活動の広がりに期待と可能性を感じ、高校演劇フェスティバルに携わることになりました。コピスのホール入口階段でパフォーマンスを行い、ロビー全体が劇場と化したことが一番印象に残っています。「地元の町が文化活動に理解があり、素晴らしいホールで温かい会館スタッフに出会えて自分の住む町を誇らしく思いました」という生徒の感想がありました。今や東上線沿線の高校演劇部にとって、コピスみよしはあこがれの舞台となっています。文化活動に理解があるコピスは本当にありがたく思います。